

川崎修一 S セメスター翻訳

2023 年 3 月 31 日

川崎修一先生が 2022 年度 S セメスター英語中級で扱った英文書の翻訳です。ざっくり。# は × のこと。崎の本来の字はこれでは出ませんでした...

実は辞書がすべて翻訳されているのが発売されているので、ちゃんとしたやつが欲しけりゃそっち買ってください。ただ授業の部分を探すのが大変そうです

第 1 章

Week1

1.1 名詞句中の数の疑問

極めて頻繁に、補語として機能する名詞句の数は主語 (つまり、意味上の主語) に一致する。

- [1] i a. My daughter is a doctor. b. My daughters are doctors.
ii a. *My daughter is doctors. b. *My daughters are a doctor.

- [2] She seems a reliable witness / *witnesses.

ここでは意味上の主語は主語の位置にあり補語名詞は主語と同じ数で、[a] では単数、[b] では複数となっている。意味上の主語が第五文型の目的語となっている場合も同様である。

- [3] i He considers his colleague a complete idiot / *complete idiots.
ii He considers his colleagues complete idiots / *a complete idiot.

同様の数の一致が as 節の付加詞でもみられる。

- [4] i As a doctor / *doctors, my daughter makes vital decisions.
ii As doctors / *a doctor, my daughters make vital decisions.

単数名詞を複数名詞に置き換えることは不可能であり、逆も同様であることに注意してほしい。この現象は一致にはっきり類似していて、確かに一般に補語は主語に一致するとされている。しかし、これはそれほど単純ではない。補語の数がその主語と異なる例も数えきれないほどある。

- [5] i They were a nuisance / a problem / a huge success / an example to us all.
ii That so-called work of art is simply four pieces of driftwood glued together.

必要とされるのは意味論的互換性で、文法的一致ではないのだ。

1.2 分配性

all と both は普通は分配的な解釈を生む。つまり、述語の属性が集合の一つ一つに適用される:

- [1] i All members of the committee voted in favour of the resolution.
 ii Both students bought a present for the teacher.

[1] は投票は全会一致である: メンバーは個別にその解決策に賛成した。もし全会一致というよりは多数派であったなら all はつかえないが、the members of the committee(または特殊な場合は the committee) と単純に言う。同様に、[ii] からは2つのプレゼントが先生のために買われたと理解できる。

all と both は (each と every のように) 明確に非分配的解釈を排除しているわけではない。しかし分配的な解釈を好む方がなぜか all より both の方が強いのである。比べてみよう:

- [2] i All /Both the students together had managed to lift the piano onto the stage.
 ii All /Both the students had handed in only five essays.

[i] では together が非分配的、協力した読みを強い、ここでは both は完全に適切ではないと考える話者もいる。together を無くせば、all は協力的解釈がまだ可能だが、一方 both の許容は問題となる: 本来は分配的解釈が極めて好まれるが、これはピアノを持ち上げるのに複数人必要だという普通の予想と相反する。[ii] の好まれる解釈は5つのエッセイが提出されたという分配的なものだ。非分配的な解釈は合計で5つのエッセイが提出されたというもので、all はこの解釈を可とするのに対し、both では難しい。between them を追加することで非分配的解釈を強いることができるが、再び both は all と比べ満足には許容できないと考える話者もいるだろう。

1.3 分配的数

分配複数は実体の集合が他の集合の個々の実体に対応していることを言及するために複数形の名詞で使われる:

Have you all brought your cameras? [それぞれがカメラを一つ持っている。]

Hand in your papers next Monday. [それぞれが一本論文を提出しなければならない。]

分配複数の解釈が通常なのに対し、分配単数も個々の例に焦点を当てるために使われるかもしれない。よってしばしば数の選択がある:

The students raised their hand(s).

Some children have understanding fathers/an understanding father.

We all have good appetites/a good appetite.

Pronouns agree with their antecedent(s).

Their noses need/nose needs to be wiped.

The exercise is not good for their back(s).

単数形は時々慣用句や比喻で義務的だったり好まれたりする:

We are keeping an open mind. [?open minds]

They vented their spleen on him. [*their spleens]

They can't put their finger on what's wrong. [*their fingers]

分配単数は曖昧さを避けるために使われる:

Students were asked to name their favourite sport.

単数形はただ一つのスポーツしか挙げられないということを明確にしている。同様に:

Children must be accompanied by a parent.

1.4 単数か複数か

あるものの2つの例が本質的に異なっているとおもわれれば、複数形が使われるかもしれない。これはよく life と death に当てはまる。ある考えではどの人の死も唯一のものに見え、こう言うかもしれない: Three men met their death と。もっと哲学的感覚からするとある人の死ともう一人の死の違いは重要ではなく sad stories of the death of kings にみられるように単数形が使われる。無意味な複数形は避けるべきだ。しかしもし複数形の—理知的または感情的な—正当な理由があればいつでも使用できる。多様性や独自性を示唆する場合、単数か複数かの選択は熟練作家の手にかかれば強い装置となり得るのだ、この詞のように: we mutually lieage to each other our lives, our fortunes, and our sacred honor. (私たちは互いに、私たちの命、財産、そして神聖な名誉を預け合っているのです。)

普通特別な個々のものを言及する言葉は例えば speeches full of classical allusion の allusion や great attention to detail の detail のように質量名詞 (不可算の中で固有名詞ではないもの) として単数形で扱われるかもしれない。しかしこれは文学のマナーでしかない。ここでは単数形と複数形の違いは特別な力は一切持たない。Classical allusions と attention to details は全く同じことを指す。どちらの形も使えるし、その選択に何も寄与しない。

きちんと定義された個々のものが複数意味されるとき、質量名詞としては扱われないがそれを指す真の単数形が使われるかもしれない。この場合例えば、we are simple creatures and yearn to be loved for our face の face や children put things in their mouth の mouth だ。ここでは複数の人々とそれぞれの人が一つだけ持っているものについて話している。同じことが singular nouns that have a plural form にみられる。19世紀では faces、mouths、forms のような複数名詞の使用はこの構文では無学だとされていた。しかし今日のアメリカでは、多くの人々が children put things in their mouths と好んで言う。この複数形は欽定訳聖書にも kings shall shut their mouths のように使われている。未だ複数形の方が単数形よりよく聞かすが、今ではどちらも許容できる。その間には意味や音調における違いはない。

第2章

Week3

2.1 いわゆる「分離不定詞」

toを含む不定詞句節では、動詞に先行する位置が二通りある。付加詞が to に先行するものと、その後ろにつくものだ。

- [22] i We ask you not to leave your seats. [pre-marker]
ii We ask you to please remain seated. [post-marker]

付加詞が後置修飾の位置にある構文は伝統的に「分離不定詞」と呼ばれている。1世紀以上にわたってそこには規範的重圧があった。実際おそらく英語全体で一番知られているものは規範文法の伝統だろう。付加詞の前置修飾を好み、この構文を受け入れないことにより、多くの作家・副編集長はこれを避けるようになった。つまり、文書の英語では [23i] のような文が [23ii] のような文の代わりに見られる。

- [23] i a. I want really to humiliate him. b. We aim utterly to ignore it. [pre-marker]
ii a. I want to really humiliate him. b. We aim to utterly ignore it. [post-marker]

2.2 全く合理的根拠がない規範的ルールの基盤

「分離不定詞」の規範的非難は19世紀の後半まででてこなかった。この構文は数百年前の文献(文学)に見られたが、19世紀になるにつれ英作文でより普及し、規範文法に分離不定詞を禁止する規則が採用されたことはこの変化に対する難色があったことを反映している。しかしこの構文が好ましくないであろうとされた理由は何一つ提示されなかった。「分離不定詞」という単語は誤った名称であることに注意すべきである: 何も分離などされていない。ラテン語には動詞の不定詞形があって、伝統的に to+ 原形の形で英語に訳されてきた。例えばラテン語の「mare」は to love と翻訳されたが、amare が一語なのに対し、to love はそうではない。連続した2語だ。よって amare の中に付加詞を置くことができないという事実は、to と love の間に付加詞を置くことが文法的規範に反しているとする根拠にはならない。

2.3 両義性回避

規範的規則とその推奨はよく表現の透明性を保つ、とりわけ曖昧さ回避をすることを動機としている。参考として例えば、以下の § 7.3 における only の配置に関する伝統的規則の議論がある。しかし「分離不定詞」の規則の不思議な特徴はそれに従うことが透明性を失い、曖昧さを作り出す可能性があることだ。to とその後ろの動詞の間におかれた修飾語はその動詞を修飾していると解釈される。しかし to の前に置かれた修飾語は原則として後ろの動詞または前の主節の動詞を修飾していると解釈されうる。まず下の明確な例を比べてみよう。

- [24] i I urge you to really immerse yourself in the topic.
ii I hope eventually to have my own business.
iii I want desperately to see him again.

[i] では really は不定詞節にある: あなたがあなた自身を没頭させることに對してであって、私があなを駆り立てることではない。[ii] では eventually が不定詞を修飾していると解釈される: 希望を持っているのは今で、将来にあるのは私が事業を持つことだ。[iii] では対称に、desperately は not ではなく want を修飾していると解釈される: この付加詞は主節にある。(語彙動詞の後ろ、終始位置にある):

- [25] i The board voted to immediately approve building it.
ii The board voted immediately to approve building it.

[i] では immediately は一義的に approve を修飾している: 委員会は (おそらく反対派との数ヶ月の討論の後に) 何かしらの建設計画への迅速な承認をすることを決定した。しかしこれは規範的ルールを侵害していて、副詞を [ii] のように to の左において修正を図る人もいるかもしれない。しかしこれは両義的で、より優勢で自然な解釈は immediately が voted を修飾しているというものだ: 彼らは迅速に提案の承認の議決を行った。さらに、副詞を左に動かす代わりに右に動かしてもうまくいくわけではないことに注意してほしい。

- [26] i The board voted to approve immediately building it.
ii The board voted to approve building it immediately.

[i] の優勢な解釈は immediately が building を修飾しているというものだ。[ii] では副詞が3つの動詞のどれも修飾していると解釈することができるが、approve を修飾しているとするのは最もなさそうである。それなら意図した意味においては、[25i] が他に比べてはるかに優れている。

2.4 現在の使用

修飾詞を不定詞 to の後に置くことは話し言葉でも書き言葉でも (著名な作家のほとんどの作品を含む) 珍しいものではない。副詞の中で特にこの位置にふさわしいのは程度を表す副詞 ([23i] の really, utterly), actually, even, further などである。

- [27] i I hadn' t[SK1] expected her to almost break the record.
 ii Following this rule has the potential to actually create ambiguities.
 iii I wouldn' t[SK2] advise you to even consider accepting their offer.
 iv It' s important not to further complicate an already very tense situation.

これらの例は問題なく完全に受け入れることができる。さらに、to の後ろの位置に来ることができるのは副詞だけではないことに注意してほしい: 前置詞句 (at least, in effect(実際), in some measure など) や名詞句 (one day など) もある。現代の用法書は上記の点を一般的に認識していて、もし透明性が向上したりぎこちなさを回避したりできるのであれば「分離不定詞」は受け入れられるとした条件のみの規則を提示している。にもかかわらず、注意深くまたは編集されて書かれた付加詞は伝統的規則を侵害することを避けるためよく意識的に前置 (または後置) の位置に置かれるというのは間違いない。

2.5 付録

副詞が to と不定詞の間に置かれているとき、極めて強い文体的な反論がある。

She ought to seriously consider her position.

特にフォーマルな書き方に関して、広く普及した分離不定詞への偏見は過小評価されてはならず、実際ネイティブの批判的反応がこれより頻繁に集中する用法はない。その結果、明らかに意識的な回避からぎこちない非慣用的な用法が見つかることも珍しくはない:

She was forced apologetically to interpose a question at this point.

申し訳なさそうなのは” she” と彼女に” forced” した者のどちらかがわからない。また比較しよう:

His hardest decision was to not allow the children to go to summer camp.

not が to の前にある場合は注意する必要がある。

His hardest decision was not to allow the children to go to summer camp.

スピーチでさえ、「彼の難しい決断は子供たちにサマーキャンプに行くことを許すことでは無かった」のように誤って解釈されることを防ぐことは難しいだろう。

第3章

Week5 There 構文

3.1 “bare” な存在文と” extended” な存在文の区別

下のように “bare” な (修飾語を伴わない) 実存と ” extended” な (拡張部を伴う) の区別をつける。

(a) ” bare” な存在文

“bare” な存在文は there, 動詞 be, 動詞の後ろに移動された主語のみを含む。

- [7] i. There are good teachers and bad teachers. (いい先生と悪い先生がいる。)
ii. There is plenty of ice-cream. (アイスがたっぷりある。)
iii. There is bound to be an official inquiry. (公式な調査があるに違いない。)
iv. Is there a bus to the library? (図書館行きのバスはありますか?)
v. There's no doubt we're in a lot of trouble. (我々が大変な目にあっているのは疑いようがない。)

動詞 be は補語無しで現れることはほぼない (例外はほとんど哲学的談話に限られている: 「我思う、故に我あり」や” time was when…” のような熟語だ)。したがって例でいう × Good teachers and bad teachers are のような存在文でないもので対応するものは無い。例 [i] は構文が実在に関する真偽文を表現する場合を描いている—いい先生と悪い先生の存在を主張するために用いられるだろう。例 [ii] ではよくある暗黙の場所格がある場合が描かれていて、我々はふつう” here” , ” in the fridge” などを把握している。事象 (発生) を表す多くの名詞は [iii] の inquiry のように” bare” な存在文でよく見られる: この場合の be は出現を表している。例 [iv] はバスの存在ではなく図書館に向かうかを尋ねている—もしくは図書館行きのバスがあるか。[v] での doubt は法 (心的態度・判断) を表現している名詞の集合の一つで、通常” bare” な存在文で見られる: この文は” Undoubtedly we're in for a lot of trouble” と練り直せる。

- | | | |
|-----|--------------------------------------|---|
| [8] | 非存在文 | 存在文 |
| i | a. A friend of yours is at the door. | b. There's a friend of yours at the door. (あなたの友達がドアにいる。) |
| ii | a. One concert is on Sunday. | b. There's one concert on Sunday. (コンサートが日曜にある。) |

- (b) 場所や時の拡張 とてもよくある拡張存在文は場所や時の副詞句をもつ。ここの例は存在文でも非存在文でも受け入れられる: しかしよく、語用論的要素はどちらかを適さないとする。これはとてもよく拡張存在文にあてはまる。

- [9] i a. Two delegates were absent. (二人の代表は欠席だ。)
 b. There were two delegates absent.
 ii a. Two delegates were deaf. (二人の代表は耳が聞こえない。)
 b. × There were two delegates deaf.
 iii a. Two delegates were employees of the sponsor. (二人の代表はそのスポンサーの従業員だ。)
 b. × There were two delegates employees of the sponsor.
 iv a. Is anything the matter? (何か問題ある？)
 b. Is there anything the matter?

(c) **叙述的補部による拡張** 叙述的補部による拡張のある存在文は体系的に許容可能な非存在文の対応がある。しかし存在文構文で許される述詞には極めて厳しい制約がある。まず、述詞は [i] と [ii] の対象で描かれたように (比較的) 永続的な性質に対して一時的でなければならない。そのような存在文で見られる述詞は [10] のようなものだ。

- [10] 計画されている 警戒させる 眠って 使用可能な 起きて より良い 確かな
 異なる 空の 無くなった 喜ばしい 存在する 正しい 病気の
 驚くべき 空いている 価値のある 間違った

実例は There's a scheme afoot to dump the premier (大統領を追放する計画が進行中だ); There are two plates missing (皿が2枚無い); There are several points worth considering further (もっと考えなくてはいけないことがいくつかある) だ。

二つ目の制約は [9iiib] で示されるように名詞句の形の主語は排除されるということだ。例外は [ivb] のようなイディオム表現の the matter (wrong) だ。

- [11] i a. A few replies are still to come. b. There are still a few replies to come. (少しの返信がまだ来ている。)
 ii a. One letter is (for you) to sign. b. There's one letter (for you) to sign.

(d) **不定詞による拡張** (一つ署名する手紙がある。) [i] では a few replies が不定詞の主語として理解されるのに対し、[i] では a few letters は不定詞の目的語として理解される。

(e) **分詞による拡張** be の後に、分詞節が続く名詞が来る存在文は二通りで文法的に解釈される。まず、従属節 (下線部) は名詞を修飾していて、したがって後に置かれた主語名詞句の一部かもしれない。

- [12] i. There were [specimens measuring over twelve inches in length]. (体長 12 インチを上回る標本があった。)
 ii. There were [some letters written by her grandmother] in the safe. (彼女の祖母が書いた手紙が金庫にある。)

例 [ii] が場所的な拡張があるのに対し例 [i] は "bare" な存在文だ。二つ目に、分詞 (下線部) は拡張かもしれない、名詞句の主語の一部ではなく:

- [13] i. There were [some boys] playing cricket. (クリケットをしている男の子たちがいる。)
 ii. There were [several people] killed. (数人殺された。)

対応する非存在文は Some boys were playing cricket と Several people were killed である一方、[12ii] の対応は Some letters written by her grandmother were in the safe だ。例 [12i]、”bare” な存在文は非存在文の対応を持たない、しかしそれは体長十二インチ以上を記録した標本の存在について告げていることはわかる。(measuring～は specimen の一般的な特徴ではなく、この文限定の specimen についての特徴)

(f) **関係節による拡張** [12] と [13] の区別は関係節を持つ存在文にも適用されるかもしれない。比べてみよう:

- [16] i. There are [people that have an IQ far greater than that]. [modifier within NP]
 (それより遥かに良い IQ を持つ人々がいる。[名詞句の中の修飾 (限定の people)])
 ii. There was [one man] that kept interrupting. (邪魔をし続ける男がいた。[関係節による拡張])

[i] では関係節は自然に people の修飾語と見做される: 文は”それ”より遥かに良い IQ を持つ人々の存在を告げている。しかし例 [ii] では、One man kept interrupting の存在文対応だと解釈できる。後半は [ii] の言い換えで、それに対し [i] は People have an IQ greater than that と言い換えることができない (People 一般のことではない) ことに注意しよう。

示された線に沿って構造的な区別を作る根拠は関係節では上の (e) で議論された動名詞現在分詞と過去分詞よりずっと弱く、[16ii] で提案された分析が有効かどうかという未解決の問いが残っている。提示できる支持する証拠の一つは固有名詞の後に関係節を置ける可能性だ。たとえば Who might be able to help? という問いの答えとして Well, there's John you could try. と返す人がいるかもしれない。[John you could try] はありうる名詞節ではないため、これは [i] のような分析にはならない。

3.2 付録

There+be を伴う存在文と基礎的な句の型の点から規定される同等の意味を持つ句の間には規則的な一致がある、もし句がこれに関係すれば:

- (i) 不定の主語を持ち、
 (ii) 動詞句の中に動詞 be をもつ

これらの二つの要求を満たせば、基礎的な句を一般的な規則による存在形に関連づけることができるかもしれない:

主語 +(補助)+be+ 述部
 ～there+be+ 主語+述部

もとの句の主語は there それ自体と区別するために there 文の”概念上の主語”とよばれるかもしれない、主な目的は”文法的な主語”だ。存在対応の 7 つの型の例は下にある:

SVC	Something must be wrong. ～ There must be something wrong. (何かがまちがっている。)
SVA	Was anyone in the vicinity? ～ Was there anyone in the vicinity?(近くに誰がいる?)
SVO	Plenty of people are getting promotion. ～ There are plenty of people getting promotion.(たくさんの人が昇進している。)
SVOC	Two bulldozers have been knocking the place flat. ～ There have been two bulldozers knocking the place flat.(ブルドーザーが場所を平らに叩いた。)
SVOA	A girl is putting the kettle on. ～ There' s a girl putting the kettle on.(女の子がケトルの電源を入れた。)
SVOO	Something is causing my friend distress. ～ There' s something causing my friend distress.(なにかしらが友達を苦しめている。)

受動態の対応もまた注意しよう:

SV 受動	A whole box has been stolen. There has been a whole box stolen. (全ての箱が盗まれた。)
SV 受動 C	No shops will be left open. There will be no shops left open.(開放される店はない。)

3.3 注意

存在文は” notional subject” のように不定名詞句を持つべきであるという規則は私たちが The money is in the box から× There' s the money in the box のような文を作ることを妨げている。しかしこの制限は定の名詞が新しい情報を伝えるとき取り除け、存在の質問への答えでは、答えが特定の (そしてしたがって定の) ものを伝えるときだ。

- A. Here we any loose cash in the house? (家に小銭ある?)
- B. Well, there' s the money in the box over there.(あっちの箱にあるよ)
- A. Is there anyone coming to dinner?(晩飯来る予定の人いる?)
- B. Yes, there' s Harry and there7s also Mrs.Jones.(うん、ハリーとジョーンさんもくるよ。)

第 4 章

Week6 二次述語

4.1 導入

☆ predicate…述語 predication…叙述

最近いわゆる二次述語が言語学文献で多大な興味をひいている。これらは二次述語が出現する文の主節の動詞との何かしらの文法関係にある構成要素、通常は直接目的語を叙述するフレーズで定義できる。主要叙述は一次叙述として言及される。二次述語を伴う文の一般例は (1) である:

(1) Jim ate the meat raw.(ジムは生肉を食べた。) 形容詞 raw は動詞 eat の直接目的語である名詞句 the meat を叙述する二次述語である。二次述語の定義属性は (主語の表現として) 一次叙述の動詞の項 (つまり文に必要な要素; 主語と目的語) である構成要素をとることだ。もう一つの定義属性は主語の表現と二次述語の間に連結詞 (“be”) の関係があることである。この章の目標は二次述語を伴う構文のいくつかの一般的な性質を調査することだ。

4.2 4 タイプの二次述語

二次述語は結果構文か描写構文か、主語叙述か目的語叙述かの二つの軸で 4 つの型になる。 結果構文は結果を表現する。これは (2) のようなものだ:

(2) She painted the wall green. (彼女は壁を緑に塗った。)

ここでは、壁を塗った結果として、言及された壁は緑になった。

描写構文の例はすでに (1) で述べられている: 形容詞 raw は the meat が食べられた時の状態を説明している。これは” I ate the meat while it was raw(私は肉が生であった間にそれを食べた)” と言い換えることができる。ここから二次述語は文の構造における時に関する副詞の機能を持つことがわかる。形容詞句の形として描写的二次述語を含む文は (3) と (4) にみられるような動詞派生の名詞中の限定用法のフレーズのある文の言い換えに近いことに注意してほしい:

(3) Bill drank the coffee cold. (ビルは冷たいコーヒーを飲んだ)

(4) Bill drank the cold coffee.

これらは近い、しかし意味において同一ではない:(3) は” 彼はコーヒーが冷たい状態の時にコーヒーを飲んだ” である一方、見たように (4) では” 彼は冷たかったコーヒーを飲んだ” だ。結果構文の二次述語を含む文は (5) と (6) で見せる通り、(3) と (4) のような交替を見せない:

(5) He rubbed the plate dry. (彼は皿を拭いて乾かした。)

(6)*He rubbed the dry plate. (×彼は乾いた皿を拭いた)((5)の言い換えとしては×)

ほかの2タイプの述語に戻ろう。主語が関係した述語は主節の主語を叙述している。例は(7):

(7) Jim left his house angry.(ジムは怒って家を出た。)ここでは angry が Jim を叙述している;つまり、ジムは家を出たとき怒っていたということだ。Angry は家が感情を持てる実体ではないため his house を叙述できない。おとぎ話なら話は別だが。

目的語叙述の述語はすでに(1)にある、便宜的にここで繰り返そう: (1)Jim ate the meat raw. この文では raw である性質が主節の直接目的語を叙述している。

下の(8)のように主語と目的語に関係した二次述語に水平軸に沿ったグリッドを設定することもできる。すでに議論された例文が入力されている。

(8) 二次熟語

	主語志向	目的語志向
結果構文	×	(2)(5)
描写構文	(7)	(1)(3)

我々は結果構文と描写構文には別として系の一部としての二次述語の意味的な型を許容すべきかもしれない: 例として(9)の条件文がある:

(9) I can carry it empty. (私は空のそれを運べる。)

“私はそれが空の間に(つまりそのときに)それを運べる”という描写構文の読みに加えて、この文は同様に条件の解釈を主張することもできる: 私はそれが空のとき(のみ)運ぶことができる。文(10)は同様に”彼は冷たい時にコカコーラを飲む。”か”彼は冷たいとき(のみ)コカコーラを飲む”のような読みができる。

(10)He drinks Coca Cola cold.(彼は冷たいコカコーラを飲む。)

条件文は第一叙述が主節において(9)の can や(11)の will のような法助動詞のある例のような法的意味をもつ状況で可能である:

(11)I will eat the meat raw. (私は生肉を食べる。)

(11)の文は”私は肉が生に食べる”か”それが生の時のみ食べる”という読みを持つ。条件文も一般的な習慣が(10)のコカコーラや(12)のように伴われる場合に許されるように思われる。

(12)I eat kiwis ripe.(私は熟したキウイを食べる。)

上の文は”私はキウイが熟している時食べる”または”熟している時のみ”という読みを持つ。条件文は特定の状況が言及された場合のみ除外されるようだ。そうして(13)の文は

(13) The next time I will drink my tea cold. (次は冷たい紅茶を飲もう)

“今度は紅茶が冷たい時(のみ)紅茶を飲もう”という読みはできない。

条件文の含意はいくつかの例で明確に存在するにもかかわらず、結果構文、描写構文、条件文の3つの異なる意味論的なカテゴリーを認識するべきかどうかは不明瞭だ。確かに He drinks his drink cold(彼は冷たい飲み物を飲む)のような文の条件文の読みと非条件文の読みの違いはかなり微妙だ。以下では条件文を描写構文の下位分類として、結果構文と描写構文のカテゴリーのみを考える。

4.3 二次述語とその主語表現のカテゴリーの地位

目的叙述または主語叙述型の二次述語はその全てが結果構文と描写構文を表現できないにもかかわらず名詞句または形容詞句、前置詞句になることができる。動詞句は二次述語としては省かれている。(14)-(19)ではいろいろな異なるフレーズの型によって成される目的叙述または主語叙述型の二次述語の例を述べた。アスタリスクで印された二次述語の発生への制約について議論しよう:

主語志向の二次述語

(14) 名詞句

結果構文 ×John painted the wall tired. (ジョンは壁を塗って疲れた。)(×結果構文)

描写構文 Prof. Jones retired a happy man. He died a hero.(ジョーン教授は幸せな男として引退をした。彼は英雄

(15) 形容詞句

結果構文 ×

描写構文 Jim wrote his paper ill/delighted.(ジムは病気で/喜んで論文を書いた。)

(16) 前置詞句

結果構文 ×

描写構文 Jim left the hospital on cloud nine. (ジムは意気揚々と退院した。)

目的語志向の二次述語

(17) 名詞句

結果構文 They appointed her managing director. (彼らは彼女を常務取締役役に任命した。)

描写構文 I met her the same age I met you. (私はあなたと会ったのと同じ年齢で彼女に会った。)

She likes her boyfriend an English teacher/tall.(彼女は背が高い彼氏がいい。)

(18) 形容詞句

結果構文 We sprayed our hair pink.(私たちは髪をピンクにスプレーした。)

描写構文 He drinks his tea flavored.(彼は紅茶に味をつけて飲んでいる。)

(19) 前置詞句

結果構文 She pushed him out of the house. (彼女は彼を家から押し出した。)

描写構文 We found him in tears. (私たちは彼が泣いていることに気づいた。)

次の裏付けられた例のように、二次述語をそれが発生する文の主語または直接目的語と、もしくはその両方と関連づけることのできる場合がある。

(20) or much of the story we could be anywhere:

in the sphere where writers meet their readers naked, and draw them into the free world of their imagination.

(物語のほとんどで、私たちはどこにでもいることができる:

作家が読者に裸で会い、彼らを想像の自由な世界に描く。)

この文は書き手または読み手のどちらか、またはその両方が裸であると言う解釈ができる。

第 5 章

Week7 There 構文の補足

5.1 提示構文

■形の話

提示構文は主語としてのダミーの there と述語としての be 以外の何らかの動詞をもつ。

- [35] i. After they had travelled for many weeks, there came a moonlit night when the air was still and cool.
(彼らが何週間も旅行した後、空気が静かで涼しい月夜が訪れた。)
- ii. Between the two candidates there exists a great deal of antipathy,
the result of months of negative campaigning.
(2 人の志願者の間には数ヶ月のネガキャンの結果、多大な反感がある。)
- iii. There remain only two further issues to discuss.
(議論すべき問題は後二つしかない。)
- iv. There seems little doubt that the fire was started deliberately.
(火が意図的に発生したことはほぼ間違いないようだ。)

[36] のような他の動詞 (もしくは動詞の働きをするイディオム) がこの構文で見つかる。

- [36] 現れる 生じる 到達する 発展する 出てくる 入り込む
消える 続く 発達する ある 存続する 現れる
起こる 存続する 存在する 突然現れる 突然現れる ある

かなりの割合が何らかの位置にあるか視界に入ってくるかと関係がある: それなら At the edge of the cave there disappeared a terrifying grizzly bear(洞窟の端で恐ろしいグリズリーが現れた) と× At the edge of the cave there disappeared a terrifying grizzly bear.(洞窟の端で恐ろしいグリズリーが消えた) の間の対比に注目しよう。

ほとんどの提示文には修飾がないか場所の拡張がある。しかし、remain は [35ii] のように不定詞による拡張を許容し、叙述的補語も許容する。(There remained only two officers alive.(2 人の役員しか生きていなかった。))

- [37] i. President Clinton appeared at the podium accompanied by three senators and Margaret Thatcher.
(クリントン大統領は演壇に三人の上院議員とマーガレット・サッチャーを伴って現れた。)
- ii. a. Behind him there stood/was a bodyguard.
(彼の後ろにはボディーガードが3人いた/立っていた。)
- b. ×Behind him there stood/were the senators.
(× 彼の後ろには上院議員がいた/立っていた。(上院議員はもう出ている))
- c. Behind him there stood/ ‡was the Vice President.
(彼の後ろには副大統領が立っていた/× いた。)(副大統領はまだ出ていないがいることはわかる)

■言語使用上の制約

提示文は移動された主語としての定名詞句の出現に適用される適切な表現の条件に関して、存在構文とは異なる。(There be 定名詞句はだめだが、There be じゃない動詞 定名詞句は OK)[37iia-c] を [37i] の続きである文脈で考えてみよう:

[iia-b] から stand を伴う提示文と be を伴う存在構文の両方は不定の a bodyguard を受け入れ、定まった the senators、旧情報を排除するということがわかる。違いは [iic] に例として挙げられている。The Vice President は新情報だが聞き手にとっては古い: そのような名詞句は存在文では排除される (参考. 上の [22iib]) が、提示文では認められる。したがって存在文が明確な動詞の後に置かれた主語が聞き手にとって新しいと言うことを要求するのに対し、提示文はそこまで新情報であることを要求しない。

第6章

Week8 非定型で動詞がない副詞句

あきらかな主語を持つが従属接続詞で始まらず、前置詞の補部でない非定型で動詞のない副詞句は独立節である。独立節は-ing, -ed, 動詞が無い句であるのは良いが、不定詞句ではない。

No further discussion arising, the meeting was brought to a close.

(それ以上の議論が起こらないので、会議は終わった。) [1]

Lunch finished, the guests retired to the lounge.

(昼食が終わり、ゲストはラウンジに戻った。) [2]

Christmas then only days away, the family was pent up with excitement.

(クリスマスが終わってまだ数日で、家族は興奮に押しつぶされていた。) [3]

いくつかの定型句 (例えば present company excepted(ここにいらっしゃる皆様は別ですが), all told(総じて), weather/time permitting(天気/時が許せば), God willing(運が良ければ)) は別に、独立節はフォーマルで、まれである。

主語が否定形または動詞のない句に無いとき、通常の主語を特定する付加規則は指示対象について主節の主語と同一なものであると仮定されるというものだ。

The oranges, when (they are) ripe, are picked and sorted mechanically. (熟れたオレンジは機械的に回収され仕分けられる。) [4]

-ed と [4] のように主語と共にある動詞のない句では、主語と動詞の省略は自明のこととされるかもしれない。他には、定型節 (形が他の要素で一つに決まる) による言い換えが従属節の主語が主節の主語と同一であることを明らかにする。普通付加規則は通常分詞句に与えられるが、それは非定型で動詞がない句にも同様に適用される:

Persuaded by our optimism, he gladly contributed time and money to the scheme.

(我々の楽観主義により、彼は喜んで時と金をその計画につぎこんだ。

[“彼が説得されたため……”])

Driving home after work, I accidentally went through a red light.

(仕事を終え家まで運転する途中、誤って赤信号を通過してしまった。

[“私が仕事後に家まで運転する間に……”])

Confident of the justice of their cause, they agreed to put their case before an arbitration panel.

(主義の正当性への自信により、彼らは事実を調停委員会に明らかにすることに同意した。

Driving to Chicago that night, I was struck by a sudden thought. [1a]

(その夜シカゴに運転していて、突然の考えに襲われた。)

Since leaving her, I have felt that life seemed pointless. [2a]

(彼女と別れてから、私は人生が虚しいことのように感じる。)

Walking down the boardwalk, I saw a tall building. [3a]

(遊歩道を歩いていて、高い建物を見た。)

[“彼らは自信があったため……”]]

To climb the rock face, we had to take various precautions.

(岩肌を登るため、私たちはさまざまな予防措置を取らなければいけない。)

[“私たちが登れるために……”]]

6.1 主語が付加されていない非定型で動詞のない句

句の解された主語と主節の主語が同一でない場合は誤りと見做され、おそらく全く文に現れない:

?Driving to Chicago that night, a sudden thought struck me. [1]

(その夜シカゴに運転していて、突然考えが襲った。)

?Since leaving her, life has seemed pointless. [1]

(彼女と別れてから、人生は虚しいことのようにみえる。)

?Walking down the boardwalk, a tall building came into view. [1]

(遊歩道を下って、高い建物が目に飛び込んできた。)

これらの例では句の主語はおそらく I だが、I は主節の主語には現れていない。このように非定型の句を保ちたいなら、主節を I が主語になるように書き換えれば良い; 例えば: [1-3] のように誤りを含む句は主語が付加されていない句である (unattached な句の誤りは伝統的に分詞句、特に-ing 句と繋がられて議論されてきた。その他の伝統的な誤りの用語として “unrelated”, “pendant”、そして懸垂分詞がある)。ここにさらなる unattached な句の例がある:

?After serving on several committees, the association elected her their president.

(いくつかの委員会での奉仕ののち、教会は彼女を会長に選出した。)

?Friend of statesmen and patron of the arts, many honors were bestowed on him.

(政治家の友であり芸術の出資者であるため、多くの名誉が彼に与えられた。)

?While in a hospital near the school, her teachers visited her regularly.

(学校の近くの病院にいる間、彼女の教師たちは定期的に彼女を訪れた。)

?To see the procession, I put the child on my shoulders.

(行進を見るため、私は子供を肩に乗せた。)

?Being the eldest, the responsibility fell particularly on my shoulders.

(年長者であるため、特に私の肩に責任がのしかかった。)

?Although the latest model, they didn't like the car.

(最新のモデルだが、彼らはその車を気に入らなかった。)

?Advised to study anthropology, his choice was psychology instead.

(人類学を学ぶことを勧められ、彼の選択は代わりに心理学だった。)

?An author of considerable distinction, people flocked to her public lecture.

(多大な栄誉のある作家であったため、人々は彼女の講演会に群がった。)

同様の誤りが-ing 句が前置詞の補部であるときに起こるかもしれない:

?On reaching the summit, the view delighted us all. (山頂に着いて、眺めが私たち全員を喜ばせた。

[1 – 3] のように、私たちはこれらの文の暗黙の主語を正しく解釈することができるが、これらの非定型の句は好まれない。もし文が暗黙の主語を特定する手段を何も与えなかった場合そのような句は完全に許容不可能だ:

× Reading the evening paper, a dog started barking. (夕刊を読んで、犬が鳴き始めた。

*Using these techniques, a wheel fell off. (これらの技術を使って、タイヤが落ちた。

*A result of the rise in prices, our economy is suffering. (物価の上昇の結果、経済が困窮している。

非定型の句の許容はおそらく特定の人や読み手がどれだけ簡単に暗黙の主語を把握できるかによって異なる。接続詞や前置詞として辞書に登録された分詞の形はもちろん付加規則は免除される。

Provided that a film entertains, few people care about its merits.

(映画が楽しければ、その良し悪しを気にする人はほとんどいない。

Considering its cost, this machine is not worth buying.

(コストを考えれば、この機械は買う価値がない。

特定の場合では、付加規則は適用されないか緩められる:

(a) 句が定型の文修飾付加詞で、暗黙の主語が話し手の暗黙の句の主語の場合、通常 I:

Putting it mildly, you have caused us some inconveniences.

(控えめに言って、あなたは私たちのいくつかの不便を引き起こした。

His moral principles, to be frank, begin and end with his own interests.

(彼の道徳的信条は率直に言って、最初から最後まで彼の興味でいっぱいだ。

To say the least, their techniques are old-fashioned.

(少なくとも、彼らの技術は時代遅れだ。

(b) 暗黙の主語が主節全体に及ぶ:

I'll help you if necessary. (必要なら助けるよ。[“……もしそれが必要なら”]

Unknown to his closest advisers, he had secretly negotiated with an enemy emissary.

(彼の側近には知らせなかったが、彼は秘密裏に敵の使者と交渉していた。

[“それは彼の側近には未知だった……”]

Sirens blared, signaling the end of the attack. [“……, を示す……”]

(c) 暗黙の主語が不定名詞または支柱語 (いみをもたない) の it のとき、構文はままだ:

When dining in the restaurant, a jacket and tie are required.

(食事をするにあたって、ジャケットとネクタイが要る。[“誰かが食事するとき,”]

Christmas was approaching, and the office was in a state of confusion. [“……だったから,”]

to-不定句はこの用法にあたっては普通である:

To borrow a book from the library, you must be a member. [“誰か借りる人に対し,”]

(d) フォーマルな科学的文書では、懸垂分詞構文が暗黙の主語が書き手や読み手の I, we, you と特定され

ると規定されている。

言語発達遅滞や言語発達逸脱の患者を治療する場合、治療は、部分的には、患者の問題を両親や教師と話し合い、その後の言語指導は彼らによって行われます。

最初の実験の信頼性を確認するため、2 人目の被験者で実験を再現した。

6.2 注意

■懸垂分詞

よく知られた規範的規則はいわゆる懸垂または主語が付加されていない分詞、つまり主節と異なる主語を持つと理解された非定型の状況に基づく ing-句の使用を禁止している。下の例を比べてみよう：

道路を離れ、彼らは樹脂の香りのする木々の暗闇へ入っていった。

参考. 懸垂分詞: 道路を離れ、樹脂の香りのする木々の暗闇が彼らを取り囲んだ。

彼らの計画をひっそり通そうとした後、Renfrewshire enterprise は今状況を和らげようとしている。

参考. 懸垂分詞: 彼らの計画をひっそり通そうとした後、状況を和らげるため試みが Renfrewshire enterprise によってなされた。

2 つ目、仮に、それぞれのペアが表す例のように懸垂分詞は文字通り解釈されれば不可能またはばかげた解釈を導きうるが、読み手はほとんどの場合暗黙の意味を推測できる。1 つ目の例では、懸垂分詞バージョンは the deep resin-scented darkness を主節の主語としてもち、そして道路を離れたのは人というよりむしろ暗闇だと示唆している。2 つ目の例では直接示唆は an attempt が計画を通すためにひっそり試みられたというものだ。

これらの例から分かるように、懸垂分詞は従属接続詞が含まれている場合と含まれていない場合のどちらでも現れうる。さらに、2 つの句での主語のどちらか一方は ing-句だけではなく、非定型の副詞句の全ての型にもまた現れうる。

ある状況では非定型の副詞句は主節と同じように主語を持たなくてはならないという規則は緩められる。下は例だ。

- i. 理解される主語が主節で示唆された句全体である副詞句 (特に条件句)

必要なら、引き継ぎますよ。

ここで動詞のない副詞句は If it is necessary for you to take over と同じで、for you to take over の場所は is の概念的な主語である。

- ii. 形式主語の it をもつ主節を説明する副詞句:

共有結合の分子やイオン化合物の式を書くとき、原子、イオン、原子団の価数を使うのが便利ことが多い。

ここでは副詞句の主語は同じ述べられていない、” 原子の価数を使う……” 人全員だ。

- iii. 正式な科学論文で、短い受動態が使われる場合の副詞句。

ゲーム検知に関連したドライバーの視覚スキャン行動を研究するために、一連のフィールド実験が行われた。

ここでは副詞句の study の主語は主節の省略された performed の代理人で、” 私たち” または” 研究者たち” と解される。

- iv. 命令文を含む主節を持つ指示文の副詞節:

語彙を変えて会話を書き出さない。

ここでは write という命令の主語は、実は従属節で変化する主語と同じ、つまり「あなた」である。

第 7 章

Week9 指定的/帰属的 be

7.1 数における不一致

数に関して言うと、主語と補語が文法的な数で異なる例が数多くみられる。ここでは連結詞の指定的・帰属的使用法から説明する。

- [8] i. The only thing need now is some new curtains.
(今我々に必要なのは新しいカーテンだ。)
- ii. The major asset of the team is its world-class opening bowlers.
(そのチームの主要な人は世界クラスの第一投手だ。)

■**指定的 be** ここでは主語は単数、補語が複数である: この種の句はよくある。この構造は通常複数形の主語、単数系の補語のようにひっくり返すことができる: Its world-class opening bowlers are the major asset of the team. The Morning Star and the Evening Star are both Venus. (明けの明星と宵の明星はどちらも金星である。) とも比較しよう。

許容不可能となる数の不一致は単語間の意味的な不完全による。

- [9] i. × The person who complained most was my parents.
(最も不満だった人は親たちだ。)
- ii. × The two people who complained most were my parents and my uncle.
(最も不満だった 2 人の人は親たちと叔父だ。)

不完全は [i] では 1 人の人を 2 人と同一視したこと、[ii] では 2 人を 3 人と同一視したことからくる。例 [ii] はどちらの要素も複数であるため文法的な数の一致の点からは扱えず、したがって [i] で文法的な一致の侵害を引き合いに出すのは不適切だ。というのも、間違いの本質はどちらのケースも同じであるためだ。

■**帰属的 be**

(この be の使い方では) 数の不一致はほとんど単数の補語との構造で複数形の主語によくあるが、その逆もまたある:

- [10] i a. Our neighbours are a nuisance. (隣人は厄介者だ。)
 b. The people who live out there are a minority cult group. (そこに住む人々は少数派のカルト教団だ。)
 c. The accidents were the result of a power failure. (その事故は停電の結果だ。)
 d. These results were really something to be proud of. (これらの結果は本当に誇れるものだった。)
- ii a. His Ph.D. thesis was simply four unrelated articles collected together.
 (彼の博士論文は単に関係のない論文を四つ繋げたものだった。)
 b. This gadget is five different tools in one. (この装置は5つの異なる道具が1つになったものだ。)

概して、不一致の場合は通常主語と補語の間に当てはまる不一致の規則の例外とするには普及しすぎている—主語-動詞一致の我々の議論で提案されたものと比較可能な規則の無効化を含んで。より満足のいくアプローチは不一致が [1ii] のように許容不可能に落ち着く場合の範囲の制限の意味的な説明をすることだ。(× My daughter is doctors; × My daughters are a doctor)

7.2 分配的、非分配的補語 (単主+複補=指定 (、分配的) 複主 + 単補=帰属、非分配的)

このセクションでは主語または補語に明確な数量詞を含む文 (All my daughters are doctors や My daughters are all doctors のような) は置いておく。我々の説明は排他的に帰属的補語構造に関係する。

この領域では分配的解釈と非分配的解釈を持つ補語の区分をする。

- [11] i My daughters are doctors. (娘たちは医者だ。)[分配的]
 ii Ed's daughters are a pest. (エドの娘たちは厄介者だ。)[非分配的]

分配的補語は複数形の主語と結合し、補語が表現する性質は主語によって言及されたセットの個々の一員 (またはそのセットの小集団) に帰属する。[i] では、例えば、医者であるという性質は私の個々の娘に分配的に帰属している。対して [ii] では、厄介者であるという性質はエドの娘全体に非分配的に帰属している。

分配的解釈は下の規則に従う:

- [12] 意味的に複数の主語 (group など) と、複数形化した形の補語は分配的に、
 単数形のは非分配的に帰属する。

これは補語が [i] では複数形、[ii] では単数形である [11] での解釈を説明している。後者は補語を複数形として得られる分配的解釈とは対照的である: Ed's daughters are pests. これは [11i] のようなものだ: 厄介者であるという性質を結合された娘たちではなく彼女ら個々に帰属している。意味的な複数形の主語の点で [12] の形成は This group are doctors のような This group は文法的に単数だが個人の複数のセット (おそらくは代表者のグループ) を指していて、医者である性質がこれらの個々人に分配的に帰属している例を呈す。そして異なる性質、非集合的または中立的 (集合でも非集合でも行ける) を区別する必要がある。

7.3 非集合的、中立的性質

非集合的性質は個々の実体だけに帰属する(まとめてようやく doctor とかはない)。Doctor はこの種の性質を表現する。よって例 My daughter is a doctor は医者であるという性質の個々の人への帰属を説明している。したがって× My daughters are a doctor は意味的に補語が複数形ではないため異常で、よって医者であるという性質は全体として私の娘たちで構成されるまともに非分配的に帰属しなければならない、もちろんこれは辻褄が合わない。My daughters are doctors では、複数形は医者であるという性質が娘たち個人個人に帰属することを示している。

中立的性質は個々の実体に帰属しうるが(非集合的)、集合的に帰属することもできる。比べてみよう:

- [13] i Our neighbour is a nuisance.(隣人は迷惑者だ。)
ii Our neighbours are a nuisance.(隣人達は迷惑者だ。)[非分配的]
iii Our neighbours are nuisances.(隣人達は迷惑者達だ。)[分配的]

ここでは、[i] は単数形の主語を持ち補語は言及する個々に性質を帰属する。例 [ii] は複数形の主語を持ち補語は言及する全体に迷惑者であるという性質を帰属する: 彼らは集合的に迷惑者だ。そして [iii] では主語は再び複数形であり補語は言及するそれぞれの一員に迷惑者であるという性質を帰属する: 彼らそれぞれが迷惑者だ。中立的性質を示す他の名詞は以下のようなものだ:

- [14] delight disgrace(恥) embarrassment godsend(恵) mess(混乱) obstacle(障害)
pest pigsty(豚舎) problem tip

Shambles(大混乱) は複数形を持たず、そのため分配的に使えない: This room is a shambles、These rooms are a shambles はいいが× These rooms are shambles はいけない。

第 8 章

Week10-11 動名詞

8.1 伝統的な動名詞

動名詞は伝統的に名詞としてまたは名詞のように働く動詞を基にする単語と理解されている。

- [19] i Destroying the files was a serious mistake.(ファイル破損は深刻な誤りだった。)
ii I regret destroying the files.(ファイル破壊を後悔している。)

Destroying the files は the destruction of the files のように置き換えられ、ここでは destruction は明確に名詞だ。したがって動名詞と分詞の第 1 の違いは分詞が機能的に形容詞と比較可能なのに対し、動名詞は機能的に名詞と比較可能であるということだ。そこにはまた第 2 の違いがある: 動名詞は分詞がするように進行形と接続しない。

8.2 動詞 vs 名詞

分詞と同じように、動詞と名詞の間の機能的な類似を話すときに 'as or like (名詞としてまたは名詞のように働く)' の形を使ってきた、その単語が動詞か名詞かという問題を残して。辞書は動名詞を動名詞的名詞であると定義しがちだが、[19] の destroying を動詞と分析する強い根拠があり、そしてそのような単語と純粋に名詞である-ing で終わる単語に区別をつけ、よって動名詞的名詞と呼ぶことにする:

- [20] i He was expelled for killing the birds.(彼は鳥を殺したとして追放された。) [動詞の形]
ii She had witnessed the killing of the birds.(彼女は鳥殺害を目撃した。) [動詞形名詞]

主要な文法的違いは下のようなものだ:

(a) 補部の形成

動詞と名詞はとる補部が異なる。特に、他動詞は名詞節の目的語をとる一方対応する名詞は of 前置節句をとる:[20i] の the birds と [ii] の of the birds を比べてみよう:He has a fear of seeming unintelligent(彼は賢くないように見られることを恐れている) はよいが、× He has a fear of the seeming unintelligent はダメである。

(b) 形容詞や副詞による修飾

名詞は典型的には形容詞に修飾される (only は副詞だが名詞を修飾可) が、対応する動詞の修飾は副詞

である:

- [21] i He was expelled for wantonly killing the birds.(彼は理不尽に鳥を殺したとして追放された。)[副詞 + 動詞]
ii She had witnessed the wanton killing of the birds. (彼女は理不尽な鳥殺害を目撃した。)[副詞 + 名詞]

(c) 限定詞

The やそれに類する限定詞は名詞と接続するが、動詞とはしない。よって× the killing the birds とはできない—名詞句 the killing of the birds か動詞句 killing the birds のみだ。

- (d) 複数形への屈折変化 名詞的動名詞は複数形にとてもよく屈折変化する、These killings must stop(これらの殺害は止まらなければならない) のように。これは動詞では絶対に不可能だ: × Killings the birds must stop.

そして再度注意しよう、[19] の destroying と名詞の destruction の間の機能上の類似は単語レベルではないがこれらが主要部となっている構成要素レベル—動詞的 destroying と名詞的 destruction の間というよりかは句 destroying the files と名詞句 the destruction of the files の間ではある。単語レベルでは、動詞と名詞はこれらがとる異なる依存要素の効力により極めて鋭く明確だ (-ing や-tion にならなければ結構違う?)。そのような依存要素がない場合、両義性が生じるおそれがある。

- [22] i Kim hates writing thank-you letters. (キムはありがとうの手紙を書くことが嫌いだ。)[動詞]
ii Kim hadn't been involved in the writing of the letter.
(キムはその手紙に書いてあることに巻き込まれなかった。)[名詞]
iii Kim had been talking about writing. (キムは書き物について話していた。)[両義的]

[i] では (writing に) 続く目的語が writing が動詞だと示している; [ii] では the と of 句が (writing か) 名詞であると示している; そして単体で生じる [iii] ではどちらにもなりうる。[iii] の動詞的な解釈では writing は解される対象 (おそらく手紙) をもちまた解される主語 (おそらくキムが書いているもの) を持つ; 名詞的な解釈では writing(書き言葉) は現象を示し非両義的に名詞の speech(話し言葉) と比較できる。

8.3 伝統的な動名詞の名詞的な起源

歴史的に、接尾辞-ing はそれぞれ伝統的な文法の現在分詞と動名詞に対応する 2 つの異なる語源 (片方-ende、もう片方が-ing) から派生している。動名詞接尾辞は名詞を動詞から作る—the breaking of the seal(封を切ること) のような我々が名詞的動名詞と呼んでいるように。しかしそのうち、この形式の文法的使用は大きく広がり、例のように名詞に関連する従属節だけでなく、breaking the seal にあるように動詞に関連するものとも結合するようになった。名詞的動名詞' 動名詞' と動詞的な' 動名詞' を分けたのはこの拡張であるが、従来の' 動詞的名詞' としての定義は後者の動詞としての形の再解析を認識できない。ほとんどの動名詞的分詞 (動詞的動名詞) の補部に見られる-ing の動詞の名詞的起源は現在の言語に当てはまる性質に反映されている。

■(a) 名詞句との分布的類似

動名分詞補部の分布はほかのどの非定型 (分詞、動名詞、不定詞) よりも名詞句のそれ (分布) にかなり近い。

特に、これらは自由に前置詞の補部として現れ、主語一助動詞 (動詞も含む) 倒置構文 (疑問文など) の動詞の後ろに着くことができる。動詞的動名詞を to 不定詞と比べてみよう:

- [55] i a. It' s a matter of breaking the seal.(問題は封を切るかどうかだ)
b. × It' s a matter of to the break the seal.
ii a. Is breaking the seal wise?(封を開けるのは賢いことか?)
b. × Is to break the seal wise?←肯定文なら ok

外置 (It ○○構文) に関して、動詞的動名詞は名詞句と to 不定詞の間のどこかに行く (it to 構文は良いが it 動詞的動名詞はきつい):

- [56] i a. × It was silly the breaking the seal. b. ?It amused him breaking the seal.
ii a. It was silly breaking the seal. b. ?It amused him breaking the seal.
iii a. It was silly to break the seal. b. It amused him to break the seal.

[iii] のように外置は不定詞とは普通だ。しかし [i] のように名詞句とは通常そうではない; 動名分詞を話す人の判断はいろいろだが、通常自動詞 was silly のような短い動詞句では可能だが他動詞 amused him のような長いものでは不可能である傾向にある。(be 動詞ぐらいしか許されない、他動詞は論外)

■(b) 所有格の場合

-ing の言葉に先行する名詞句は名詞的動名詞の構文のように動詞的動名詞構文の所有格の場合になる。(名詞的に my, his とかつけるのを動詞的にも適用できる)

- [57] i. I resented his constant questioning of my motives.(私は彼が同期について絶えず質問することに腹を立てた。)
ii. I resented his constantly questioning my motives.

questioning は [i] では名詞で [ii] では動詞であるということは constant(形容詞) と constantly(副詞)、of my motives(前置詞句) と my motives(名詞句-目的語) の間の対比により明白である。しかしどちらにも所有格の his がある。そして典型的な所有格の使い方はもちろん動詞ではなく名詞の従属節を示すことだ。(his の後って普通名詞つくやん、動詞はないやん)

8.4 動詞的動名詞の補語における所有 vs 非所有格の主語

主節 (his reading など) が補部として働くとき、所有格と対格/素のどちらの形式も見られ、このセクションでの我々の関心はそのうち一つまたはもう一方を好む要因を調査することだ。強調したい主要なポイントは名詞句が動詞的動名詞の主語であるときのみこれらの形式の変更の可能性があるということだ。比べてみよう:

- [58] i I enjoyed his/× him reading of the poem.(私は彼がポエムを読むのを楽しんだ。)
 [名詞句の限定詞: 所有格が必要](of がつくような名詞的動名詞の時は his しかだめ)
- ii I remember his/him reading my mail.(私は彼が私のメールを読んだことを覚えている。)
 [主語: 所有/対格が許される](これは of がついていないから動詞的動名詞で、him も ok)
 → mind me opening the window はいいが mind me opening of the window はだめ

[i] では reading は名詞だ: よって先行している名詞句は限定詞で所有格である必要がある。Kim didn't like his singing は singing が名詞か動詞かによって両義的であるのに対し、Kim didn't like him singing は singing が動詞である必要がある (名詞の解釈だと彼の歌い方に関心を置いている (参照.Kim didn't like him singing of this difficult area(キム (女) は彼のこの難しい箇所の歌い方が好きではない)) のに対し、動詞的解釈では彼が歌うことの行動や事実が問題となる (参照.Kim didn't like his singing obscene songs(キムは彼が卑猥な歌を歌うのが好きではない))。) ため一義的である。名詞が従属説の主語である [ii] では、形式の変更がある。

名詞句が動詞的動名詞の補語の主語になっているこの二種類の構文では、所有格か対格/素かの選択は下の要素による:

(a) 形式

所有格はインフォーマルな形式よりフォーマルな形式の方がやすい

(b) 名詞句の型

いくつかの名詞句は所有格を取らないが、フォーマルである (所有格がとれないだけで、対格でもフォーマル): ダミーの代名詞 (特に there); this, that, all, some のような名詞句; both of them, some of us のような代名詞で終わる名詞句; など。これらの名詞句は名詞句構造では限定詞として現れないが動詞的動名詞の主語として非所有格で簡単に現れる。

- [59] i He resented [there/*there's having been so much publicity]. (彼は宣伝の多さに腹を立てた。)
 ii I won't accept [this/*this's being made public].(私はこれが公開されることを認めない。)

通常所有格を排除しないものの、動詞的動名詞の主語となるのを好まないものがある。

- [60] i He objected to [the girls'/?the girls' being given preferential treatment].
 (彼はその優遇されている女子たちに反対した。)
- ii It involved [the Minister of Transport'/?the Minister of Transport's losing face].
 (運輸大臣の面目丸つぶれが絡んでいた。)

[i] での正規の複数形の girls は話し言葉では対応する所有格と同一 (発音自体は同じ) であるが、アポストロフィーによって区別され、この構造ではアポストロフィーを除いた形の方がより適切である。(複数形は所有格にしない)(無視して良い文→ [ii] では名詞句は主要部の後ろに従属する前置詞句 of transport を含み、そのような名詞句が所有格が名詞に対する限定句 (the Minister of Transport's performance) のとき所有格をとれる一方、このようなものは動詞的動名詞ではとてもあり得ない。← 無視して良い文)

より一般に、重要な長さや複雑さの名詞句、とくに主要部の後ろに従属する要素とともにある動詞的

動名詞の所有格はぎこちない。(長い名詞 + 所有の性質 ([60ii]) はきつい) これは人称代名詞とともに、そしてその人々を指し主要部の前に従属する要素として一つか二つの単語を持つ単数形の名詞句の後でもっともありえる。(人称代名詞・との相性がいい)

(c) 主節構文

主語として機能している動詞的動名詞はということか他の補語機能より所有格を選びやすい。また連鎖動詞クラスでの違いもある:appreciate,countenance(賛成する、許す),mind などの動詞は like や hate より簡単に所有格をとる、stop では所有格は全く出現しそうにないのに。(She stopped them using it はみられるが、× She stopped their using it はみられない。)

第9章

Week12 way 構文

9.1 導入

取り上げる構文は概略的に次のように表される (V は非状態動詞で (あればほぼ何でも)、OBL(つまり斜格=前置詞句) は方向性を符号化する。):

[SUBJi [V [POSSi way] OBL]] (主語 非状態動詞 所有格 way 方向の前置詞句)

この構文の実例は主語の指示対象が前置詞句によって指定された道に沿って動くことを仄めかす。構文の意味は構文の要素に基づいて完全に予測することはできない。例えば、(1) は Frank が prison の外につくられた道を通して移動したことを含む。(「移動した(脱獄した)」という意味は構文にして初めて出てくる)

(1) Frank dug his way out of the prison. (フランクは刑務所の外への道を掘った。)

同様に、(2) はフランクがニューヨークへの旅を何とか成功させたことを意味する。

(2) Frank found his way to New York. (フランクはニューヨークへの道を切り開いた。)

しかし、どの関連する語彙項目 (文を構成する単語) も運動を伴わない。これを確認するため、(1) と (2) を (3) と (4) と比べてみよう:

(3) Frank dug his escape route out of the prison.

(4) Frank found a way to New York.

これらの例の唯一の解釈は前置詞句が直接目的語を修飾しているということだ。(3) も (4) も動きを内包していない (way がいないから):

(3') Frank dug his escape route out of the prison, but he hasn' t gone yet. (まだ行っていない)

(4') Frank found a way to New York, but he hasn' t gone yet. (まだ行っていない)

これは運動を伴う (1)(2) と対照的だ:

(2') × Frank dug his way out of the prison, but he hasn' t gone yet.

(3') × Frank found his way to New York, but he hasn' t gone yet.

(1) と (3) の違いは way が escape route と置き換えられていることだ。例 (4) は way が移動を表していると仮定することができない、なぜなら way がこの例にいてしかし文が運動を伴わないためである。運動は (5) の表現が運動を伴わないため移動は所有格と way で規定されないことが指摘されるべきであろう (one' s way だけで確定移動だとは限らない):

(5) He knows his way around town.(彼は街のことをよく知っている。)

ここでは動詞 know が状態動詞で、移動はなく構文は非状態動詞を要求する。

9.2 ふたつの異なる意味:”手段”と”様態”

この構文ではふたつの言い換えがある: 動詞が動きの手段を指定するものと、動詞が同じ広がりを持つ行動や様態を指定する場合だ。例えば、(6)は(7)で与えられたふたつの方法で解釈できる:

- (6) Sam joked his way into the meeting. (サムは冗談を言って会議に入ってきた)
- (7) a. Sam got into the meeting by joking. (サムは冗談を言うことで会議に参加した。)(手段)
b. Sam went into the meeting (while) joking. (サムは冗談を言いながら会議に入った。)(様態)

手段と様態の解釈は文法において同じ地位を持たない—実際は手段の解釈が主だ。オックスフォード大学新聞、ルンド、ウォール・ストリートジャーナル、農務省コーポラでは、動きの手段と対照的に同一の広がりを持つ動作や様態を指定する動詞はまれだ。事実、コーポラでの様態の解釈の動詞の出現数は1177のうち40、データの4%未満だ(どのコーポラでもこの割合は4%未満である)。

加えて、全ての話者が厳密な様態解釈を許容しているわけではない。その一例が(8)だ:

- (8) He belched his way out of the restaurant. (彼はげっぷをしてレストランを出た)

この様態の解釈(主語がげっぷをしながらレストランを出た)を持つことを意図されている文の判断を求められたとき、私が確認した何人かの話者は代わりに腹を下すことを動きが達成される手段となる状況を考案した。例えば、ある話者は他の食事客がゲップをとっても不快に思いその人が出られるよう道を開けた文脈ではその文を許容できると提案した。他の1人の話者はゲップが推進の手段として理解できるならこの文が許容可能だと提案した。他には、私も含め、この様態の解釈はぎりぎりだと考える者もいる。

今まで見てきたように、構文が中心的意味(今回は手段)と関連し、その意味から拡張されるのが自然であり、これらの事実は容易に説明がつく。我々は様態解釈をより基本的な手段の解釈の拡張と分析することができる(あくまで手段が主で、様態はおまけ)。この分析は例えば様態解釈しか許容せず手段解釈を許容しないという話者がいないと推測ができる。そして今まで、私は会ったことがない。

面白いことに、この構文の手段解釈が様態解釈より4世紀以上早く存在していたことを示す通時的な証拠がある。最初のオックスフォード英語辞典に引用されたものは1400年からだ:”I made my way…unto Rome.(私はローマに向かった)”。他の動詞を使った最初の引用は1964年から:[He] hew’ d out his way by the power of Sword.(彼は剣の力で道を切り開いた)”。最初のオックスフォード英語辞典に引用されたもので純粋な様態解釈を持つものは1836年、この構文が初めに手段解釈で生産的に使われてから1世紀でmakeで初めて引用されてから4世紀以上後からの”The muffin-boy rings his way down the little street(マフィンボーイが小さな通りを鳴らしていく)”だ。

まとめると、手段解釈がより中心的またはbasicな構文の解釈であると主張されてきた。様態解釈は(1)様態解釈がどの4つのコーポラでもまれ(データの4%未満を占める)であること(2)話者の様態の場合の許容判断が許容不可能からぎりぎり許容可能まで幅があること(3)手段解釈は通時的に様態解釈より数世紀先行していることを根拠に基本的な拡張ではないと主張されてきた。

9.3 手段解釈: 道の創造

ジェスパーソン (1949) は直接目的語、POSSway は結果目的語の型であったという基礎的な洞察を持っていた。これは動きが場所をとる道 (the way) が前からあったわけではなく、むしろ主語が指示する何らかの動作によって創られたことを意味すると解釈できる。この観察は純粋な様態の解釈という例外があるにも関わらず、構文は主語が外部の困難にかかわらず主語が動くことを伝えることに使われること、もしくは何らかの間接的な方法で道がすでに確立されたわけではないが何らかの意味で移動者によって創られなければならないことを説明するために使うことができる。次を考えてみよう:

(9) Sally made her way into the ballroom. (サリーは舞踏場への道を切り開いた。)

この文はサリーが人混みまたは障害物をかき分けて移動したことを示唆していると取れる。サリーが単に歩いて空の舞踏場に入ってしまったことを意味するためには使えない。比喩的な動きの場合、道を作る必要性はなんらかの困難や比喩的な障壁があることを示唆している。例えば、次の間の許容の違いに注目しよう:

(10) a. ?Sally drank her way through the glass of lemonade. (サリーはレモネードを飲み干した)

b. Sally drank her way through a case of vodka. (サリーはウォッカを飲み干した)

例 (10b) はウォッカの容器を飲み干すほうがレモネード一杯を飲むことより何らかの障壁を乗り越えることを要求されていると解釈することが容易なためずっと許容可能だ。

(比喩的な) 道が作られたかもしれない場合は社会的な障害が道にあるとき与えられる。次の例を対比してみよう:

(11) a. ?Welcome our new daughter-in-law, who just married her way into our family. (結婚して家族になった私たちの)

b. Welcome our new daughter-in-law, who just married into our family.

例 (11a) は件の息子の妻が結婚によってなんとか家族の一員になったことを暗示しており、このような暗示は誠実な歓迎とは矛盾しているため奇妙である。次の例は関連している:

(12) Joe bought his way into the exclusive country club. (ジョーは高級カントリークラブに入った)

この例はジョーが社会的障害にも関わらずカントリークラブに何とか入ったことを包含している。社会的障害にも関わらず比喩的に道を作ることの必要性は主語の指示対象が彼の目標を達成するためになんらかの認可されていない手段を使ったことを暗示していることを説明できる。